

高峰讓吉の代表的発明（タカヂアスターゼ、アドレナリン）

タカヂアスターゼは、明治27年に高峰讓吉博士により発見された消化酵素です。その名は、酵素を意味する「Diastase」を呼びやすいようにドイツ語読みした上で、その前にギリシャ語で「最高」あるいは「優秀」を意味し、高峰の姓の一字にも通じる「TAKA」を冠したものです。

現在でも医療用の医薬品に用いられたり、大衆薬の成分として用いられていますが、夏目漱石の小説『我が輩は猫である』の中に「彼（主人）は胃弱で、皮膚の色が淡黄色を帯びて弾力のない兆候をあらわしている。そのくせに大食を食らう。食った後でタカヂアスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。」という一節がありますように、古くから広く飲まれていた薬剤です。

その後、明治34年には副腎から分泌されるホルモン「アドレナリン」を結晶化し単離することにも成功しました。このアドレナリンは、止血剤や強心剤として医療のあらゆる分野で幅広く使用されています。



高峰博士から国内販売権を得て商品化されたタカヂアスターゼ

(写真提供：三共株式会社)